

GAY Culture

ゲイカルチャー

映画に学ぶゲイライフ

科学技術翻訳・評論家

玉野真路

Shinji Tamano

1990年前後から、ハリウッドはもとより、フランス・イギリス・スペインなどヨーロッパでも、日本・香港・台湾・タイなどアジアでもたくさんゲイ映画が製作されてきた。ここ10年でゲイ映画が爆発的に作られたことで、ゲイの人生の諸相を照らし出せるようになってきている。まだ、あらゆるゲイのあらゆる側面というわけにはいかないが、映画でゲイの人生を一通りたどれるくらいになってきた。ここでは、そんなゲイ映画の中から映画としての完成度も高いものだけを選んで、ゲイの一生を追ってみた。それではさっそくご覧いただく。

ぼくのバラ色の人生

監督●アラン・ベルリネール

制作年●1997

上映時間●88分

製作国●フランス・イギリス・

ベルギー

日本初公開年月●1998.11

まずは子供時代。子どものころ、女の子っぽいところのあった男の子が成長してゲイになる確率はやっぱり高い。この本を読んでいる皆さんの中にも、そういう人は多いだろう。「あつ、ぼくのことだ!」と思つたあなたはもちろん、そうでなくても自分はこの子とどこか違うと意識せざるを得なかった人は是非ご覧ください。落涙必至です。

リュドウィックは、将来、結婚してお嫁さんになるのが夢の男の子。テレビでやつてる妖精バムが大好きでいつも一緒に踊っている。近所のパーティーにはおめかしして出かけたし、学芸会では白雪姫にもなりたいた。たつたそれだけなのに、学校で問題児扱いされた挙句、ついに追われてしまう。そうこうしているうちに、お父さんも仕事を失い家族もろとも地域を追われていってしまう。だけど、リュドウィックの可愛らしいひたむきさのお



DVD 4,700円(税抜)発売中
発売元：日活/東芝エンタール
フロンティア
販売元：日活



陰で単なる悲劇になったりはしないの
がこの映画の魅力だ。好きな男の子に
「女の子になったら結婚しようね」と
告白する前向きさ。周囲の大人たちが
が自分のことで頭を抱えているときに
おなかをこわして、「生理がきたよ！」
と喜んでかけこんでくるときの笑顔の
無邪気な輝き。苦しくて、この上なく
安っぽい極彩色の「妖精バムの世界」
に逃げ込むしかないときもある。だけ
ど、おばあちゃんも応援してくれてい
るし、ママだって最後には、リュドの
世界を理解してくれた。

リュドヴィックを演ずるジョル
ジュ・デュ・フレネのこの上なくカワ
イイ、迫真の演技と、その子どもの
世界を見事に映像化した監督アラン・
ベルリネール。自我に目覚める前の子
どもにも、セクシュアリティの世界が
あり、そこには特有の問題がある。子
どもの問題は、子どもだけではなく、
家族をいやがうえにも巻き込んでし
まうのだ。リュドの天真爛漫さはリュ
ドの家族には凶と出るが、映画とし

ては吉と出た。切なさや無邪気さ、
悲劇とキツチュな滑稽さが混じり合っ
た芳醇な時間を楽しめる映画だ。

モーリス

監督●ジェームズ・アイヴオリー

制作年●1987

上映時間●120分

製作国●イギリス

日本初公開年月●1988.01

青年期に入ると、社会における同
性愛の位置付けを認識して、苦悩し
たりもする。とはいえ、若いと情熱的
な恋もするし、エッチもしたい。その
狭間を綱渡りのように生きたのが80
年代以前のゲイの典型だった。そんな
風情がよくでてるのが、この『モー
リス』だ。

イギリスの寄宿学校で愛合った
モーリスとクライブだが、ゲイを生き
るのか、一時の気の迷いとするのかで、
その後の人生が大きく離れて行く。

社会的には、その後女性と結婚し弁
護士となり、さらに代議士を目指す
クライブの方が幸せだろう。一方、ク
ライブとの一件で放校処分になった
モーリスは、自分の中から沸きあがる
欲望を抱えたまま社会に出るが、そ
の欲望を抑え切れず悶々と日々を過
す。

まだ強い差別が残り、自己の社会
的な受容を取るか、自分の欲望の充
足を取るか二者択一だったころの時代
の空気を伝えている。その時代にいち
早くゲイとして愛を生きたのが、モー
リスなのである。獵場番のアレックが
裏窓からモーリスの部屋まで梯子を
上って来るシーンのエロティシズムや、
南米行ききの船着場に現れなかったア
レックが待つ裏庭の小屋に行くことを
決心するラストシーンは感動的だ。

青春時代は、自分のアイデンティ
ティを求めて右往左往するものだ。ゲ
イというアイデンティティを生きるか
どうかも自分で決めればいい。だが、
自分の欲望は日々ついてまわる。苦し

い状況をいくつも経験しながら、最終的に自分の欲望を肯定したモーリスは、メジャー映画史上はじめて自己否定に陥らなかつたゲイである。

E・M・フォスターの美しい原作を、さらに美しく耽美的な映像のなかに描き出したのがジエームズ・アイボリー監督。ヒュー・グラントの出世作となり、美少年好きな女の子たちにも賞賛された。

現代の若者のあつからんとゲイを楽しむ雰囲気を満喫したければ、ハッテン公園で同級生と知り合つて付き合ひ出してしまふサイモン・ショア監督『同級生』(1998、イギリス)もお勧め。

アタック・ナンバー・ハーフ

監督●ユンユット・トンコントーン

制作年●2000

上映時間●104分

製作国●タイ

日本初公開年月●2001.04.14

ひとしきり苦悩した後には、思いっきりはじけよう。そこには魅惑的なゲイの世界が広がっている。そこで紹介するのがタイ発の素敵なゲイのバレーボール映画。ゲイはなぜかバレーボールが好きで、わが国でも全国大会まで開かれるほどだ。そんな文化が海の向こうでもあるんだなって分かつと、オカマは世界中どこに行つてもオカマなんだと分かつり、うれしくなつてしまふ。

タイに実在したバレーボール・チームが原題にもなっている「鋼鉄の淑女」。そんなバレーボール・チームがタイのバレーボール選手権で優勝したという実話をもとにした映画。

あるバレーボール・チームに、どう見てもオナベにしか見えない監督が赴任してきた。彼女は選手にオカマのジュンとノンを選ぶ。彼(彼女?)らは、実力はあるのにオカマだという理由で、チームでのけ者にされる。他のメンバーはどんどんチームから抜けていき残つたのはチャイ一人だけ。それなら

自分たちでチームを作ろうと、旧友を誘つてチームを結成。そのチームがすごい。ノンケはチャイ一人で後は全部オカマ。水牛の異名をとる軍人のノン、美人ニューハーフのピア、隠れゲイのウィットとバラエティ豊かな構成である。彼らのことをよく思わない大会本部の妨害などもあるが、そんなことにはめげずどんどん勝ちあがつていく。

とかく恋とセックスだけが強調されがちなゲイの描写だが、この映画ではスポ根の世界に友情を描き出した。ゲイの楽天地とのイメージが強いタイの社会にも、とくに華僑系を中心に差別があることもしつかり表現されていて、単なるお笑いに終わっていない。しかも、ニューハーフから隠れゲイまでオカマの中の多様性も表現されていて、意外と勉強にもなる。でもやっぱりオカマはオカマ。三つ子のオカマなど、笑える小ネタもツボにつき、他ではありえない素敵な作品となった。



DVD 4,700円(税抜) 発売中
発売元:クロックワークス/角川書店
販売元:クロックワークス

プエノスアイレス

監督●ウオン・カーウアイ

制作年●1997

上映時間●98分

製作国●香港・日本

日本初公開年月●1997.09

一生に一度くらい、人生が狂うほどの恋をしてみたい。だれだって1度や2度はそう思った経験があるだろう。そんな恋の良いところ取りが映画には許される。

香港映画＝クンフ・アクションという定式をくつがえした監督の一人ウオン・カーウアイが、ゲイの撮影監督クリストファー・ドイルの流麗なカメラワークを得て描き出す狂おしいほどの恋。しかも演じているのが香港映画界きつての二枚目大スター、レスリー・チョンとトニー・レオンである。ウイン（レスリー・チョン）とファイ（トニー・レオン）は何度も別れたり、また付き合ったりを繰り返している



DVD 4,700円 (税抜) 発売中
発売元: プレノンアッシュ
販売元: パイオニアLDC

ちよつとしたときに見える愛らしさが不可欠だ。こんな役作りができる俳優は世界にも多くはあるまい。

情感を湛えた映像にとっぷりつかののが、この映画を見るためのコツ。ウオン・カーウアイ独特のリズム感に乗れたら、この映画はあなたを恋の深淵にさらっていくだろう。30歳も超えた男二人が演じるには、いかにも大人気ない設定だ。20歳ならば当たり前のこと、30歳超えると憧れと恋ることがある。そんな憧れに身を浸す一時。

二人のうちトニー・レオンの尽くしつぷりに自分を重ねるか、レスリー・チョンの男つばさに憧れるか。それがあなたのこれからの恋愛を占うかもしれない。

トーチキング・トリロジー

監督●ポール・ボガート

制作年●1988

上映時間●115分

製作国●アメリカ

日本初公開年月●1989.12

恋愛が成就すると次に来るのは結婚、そして子どもだ。とはいえ、日本ではゲイには婚姻制度がまだない。そこで登場するのが「養子縁組」である。役所に届けを出すだけの、きわめて簡単な手続で親族になれる。アメリカでもほとんどの州で、同性婚は認められていないので、その事情は日本とさしてかわらない。また先頃、アメリカ精神医学会が同性愛者のカップルが養子をもらい、里親になることに何の問題もないと言う研究結果を出した。映画では10年以上前にゲイの里親が誕生している。

アーノルドはゲイバーで女装をして歌を歌って生計を立てている。手痛い失恋を経てやつと年下の男の子アランとの恋愛が成就した。彼とのラブラブな生活、やがてアランはアーノルドに結婚を申し込む。ところが、そのアランはゲイ・パッシングにあつて殺さ

れてしまふ。悲嘆にくれるアーノルドのところに、別れた元彼が来たり、母親がたずねてきたり……。母親とゲイの息子の愛ある確執をこの映画ほど鮮明に描いた映画はない。「お母さんのことは愛しているけど、僕を認めてくれないのなら出てって！」と言う、アーノルドの台詞を一滴の涙もなく聞くことは難しい。アーノルドはつらい状況を乗り越えて、孤児院から迎えた10代の少年とともに生きていく。

オ・オフから始まり、ブロードウェイ本通で大ヒットし、トニー賞を受賞した傑作舞台の映画化。脚本と主演を原作者ハーヴェイ・ファイアスティンが担当。最初は〈キモイ〉女装の姿が、次第に奥深い人間性を現していくにつれ、我々の目はスクリーンに釘付けとなる。母親役が女優アン・パンクロフト。ゲイの息子をもつてしまった母親の心の痛みと息子を愛する強さの両方をあわせもつ難しいキャラクターを見事に演じている。1987年の『モーリス』に続き、19

ハッシュュー!

監督●橋口亮輔

制作年●2001

上映時間●35分

製作国●日本

日本初公開年月●2002.04.27

88年にゲイ・プライドを謳いあげた、もはや古典的といつてもよい傑作。

養子ではなく、本当の子どもをゲイが持つというのはどういうことだろう。ゲイがどれだけセックスをしても子どもができることはない。それで諦めていながらも、そこはかたなく子どもが欲しいと思っているゲイも多い。そんなあなたの前に、「あなたの子どもを作りたい」という女性が現れたら……。『20歳の微熱』、『渚のシンドバッド』で若いゲイを描いてきた日本を代表するゲイの映画監督・橋口亮輔の最新作は、そんな問題意識から出発する。



DVD 4,700円(税抜)発売中
発売元:ハピネット・ピクチャーズ+アーティストフィルム
販売元:ハピネット・ピクチャーズ

ベット・シヨップで働く高橋和也は、ゲイである自分を楽しんでいる。一方、その彼氏である田辺誠一は会社でも自分を抑圧して生きている。二人の前にふと登場するのが片岡玲子だ。彼女は二人に子どもを作ろうともちかけず。結婚したいわけではないが、子どもが欲しい、と彼女はいう。ズケズケと二人の中に割り込んでくる女性とゲイカップル、合わせて三人は紆余曲折を経て、次第にお互いを理解しあ

うようになっていく。

親との対決が描かれる最後の緊張感みなぎる長回しのシーンが見もの。こうした三人のつながりの中で、主人公三人が最後にする選択は? 橋口監督は、映画技術的には必要十分な簡素さで、三人の絡み合いをリアリティあふれる演出で捕らえた。いやが上にも人物造形に意識が集中する。その監督の要請に見事に応えた3人の役者たち。ハツとするような台詞が随所に差し挟まれ、彼らの感覚を我がことのように見入ることになる。子どもを持ったノンケは子どもの成長に自分の成長を重ね合わせることができず、ゲイにはそれができない。年と共に徐々に衰えながら、ひたすら日常を生きるようになる。ほくたちは、これからゲイが直面せざるをえない、そんな問題に思いを馳せずにはいられない。いつだったか、「一般映画でゲイ映画を3本も撮っているのは、世界でほくだけなんだ」と自慢げに言った監督の自信作。

プリシラ

監督●ステファン・エリオット

制作年●1994

上映時間●103分

製作国●オーストラリア

日本初公開年月●1995.07

桃色に塗り上げたバスに乗ってガイ・ピアース、ヒューゴ・ウィービング、テレンス・スタンプが演じる、20代、30代、50代の三人のドラッグクイーンがオーストラリアの砂漠を旅するロードムービー。

曰く、都会の喧騒に紛れて生き延びている彼女たちが、友人の死の悲しみを軽くするために旅にでる。大きなバスを入手して「プリシラ号」と名づける。彼女たちの旅路に待ち受けるのは、差別と理解の波状攻撃。あるときは、せつかくのバスに「出て行けオカマ」と書かれることもある。もちろん、しぶといオカマのこと。「出て行けオカマ」くらいではへこたれない。

い。バス全体をピンクに塗りたてて、広大な砂漠に、銀色の衣装を何メートルもたなびかせ、ピンクのスモークを吹き流す。またあるときは、アポリジニと一緒に一夜を踊り明かすこともある。中途半端な文明を生きる田舎町の人より、よほど純粹にドラッグクイーンのシヨを楽しむアポリジニたち。そういった良くも悪くもさまざまな出会いの一つひとつに、こちらも一喜一憂しながら、映画は舞台の乾いた大地よろしく、ジメジメしたムードは皆無のまま進んでいく。

なによりドラッグクイーンが映画史上もっともキラキラと輝いている。それまでの「女装」のイメージと、「ドラッグクイーン」のイメージを明確に区別したという意味でも画期的だった。この映画を見て感動し、ドラッグクイーンを目指した人も多いはずだ。アバやシャリーーンといった、いかにもゲイ受けしそうなサウンドトラックも魅力大。[We never been to me] (楽園にいったことならあるけれど)、「私」に

だけは行ったことがない」という歌詞が、ドラッグクイーンを乗せて砂漠を走り抜けるバスや岩山の上でのドラッグ・シヨの映像とともに、ときに切なく、ときに軽やかに、ときに元氣良く響く。そんな残像をあなたに一生残すだろう。

メルシー！人生

監督●フランシス・ヴェベール

制作年●2000

上映時間●84分

製作国●フランス

日本初公開年月●2002.09.07

息子も自分のことを避けているようなウダツの上がらない中年経理マン、ピニオンは自分のリストラのうわさを聞きつける。ちょうどそのとき、青ざめている彼の隣室に、訳ありげな老人が引越してくる。彼はリストラされたくなければ、ただゲイだとカミングアウトすればいい、という。彼の助言を聞きいれて、ゲイを飄々と演じるノッケのピニオン。ところがカミングアウトの後、突然女性にモデルようになったり、息子に見なおされたり、会社の広告塔としてコンドーム帽をかぶってゲイ・パレードに参加したりと、さまざまなのが彼の身の回りに起こる。

中年にさしかかると仕事が人生の中心課題になってくる。リストラされそうになったとき、どうすればいいのだろう。ただゲイだとカムアウトすればいい。これがリストラ寸前のコンドームメーカーの経理マン（ノッケ）が選んだ選択肢だった。万年平社員で、妻にも見捨てられ

奇想天外なストーリーのようだが、これには実はこんな事情がある。何を言われても「傷ついた!」「差別だ!」と叫んでいれば、相手が平身低頭謝ってくれるという時代がゲイにはあった。この映画でいうとゲイはゲイであるがゆえに、どんなに業務成績が悪かろうと解雇できないのである。ゲイはだ



れもが認める弱者であるがゆえに誰
も触れてはいけない、逆転した強者
だったのである。映画もゲイを腫れ物
に触るようには扱ってきた。これはそん
な行き過ぎた人権意識を逆手に取っ
て戲画的に描き出した上品なコメ
ディだ。

監督は、『Mr.レディ Mr.マダム』
という、絶妙な演出で1978年の
公開時には画期的なゲイ・ブライド
を描いた粋なコメディで、脚本を務め
た経歴のあるフランシス・ヴェベール
・ビニョンを演じるのはフランスきつて
の名優ダニエル・オートゥイユ。普通
なら周囲の変化に右往左往してもよ
さそうな役柄を飄々と好演。フランス
では430万人を動員して大ヒット
となった。こういう映画がヒットする
土壌がうらやましい限りだ。

ゴッド&モンスター

監督 ●ビル・コンドン

制作年 ●1998

上映時間 ●106分
製作国 ●アメリカ

日本初公開年月 ●2000.12.23

ゲイにも当然老いはやってくる。ゲ
イの老年の過ごし方は、今後、ゲイ・
アイデンティティを肯定した世代が
老年にさしかかってくるにつれて、ま
ずまず大きな問題となってくるだろ
う。ゲイの老人の孤独な生き様を描
いた作品がこの映画だ。

自分がゲイであることを肯定して
生きている主人公ジェームズ・ホエー
ルは『フランケンシュタイン』『フラ
ンケンシュタインの花嫁』などの傑作
ホラー映画を作ったことで知られるハ
リウッドの映画監督。引退して孤独
な生活を送っていて、自分を抹殺して
くれる人間を探していた。そこに若い
マッチョな庭師ブーンがやってくる。
ホエールはさつそく彼を「スケッチの
モデルになってくれ」と誘う。反発を
繰り返しながらも次第に二人の間に
絆ができていく。あたかもすべてが予

定通りであるかのように言葉たくみ
に庭師を攪乱していくホエール。ブー
ンは困惑しながらも不思議な老人の
魅力に捕らえられていく。嵐の夜、ホ
エールはついにブーンのヌードを描く
ことに成功する。でも、最後には涙な
くしては見られない幕切れが待ってい
る。

ゲイとして老後を生きようとする
と、「家族」というバックアップ集団
がおらず、孤独になってしまいがちだ。
昔のことを思い出しながら、メイドに
「地獄に落ちる」と言われながら、そ
うやって一人死のときを待ちつつける
老人。そんな老人をカミング・アウト
したゲイの名優イアン・マッケランが、
繊細な表情で演じていく。ゲイとし
て生きるゲイの老後の現状を描き出
した。これから私たちはどんな老後
を迎えるのだろうか。

監督はビル・コンドン。フラッシュ
バックを効果的に用いた編集で、ホ
エールが自己を孤独な怪物フランケン
シュタインに投影していたことを明瞭



に示し、老人の孤独を描くのに成功した。

日本では、これだけ明確にゲイ映画であるにも関わらずゲイ・ムーブメントとは関係なく、一般の映画ファンの間で署名運動が起こり、劇場公開が実現した、いわくつきの作品。そして、その価値がある傑作。

X-men

監督●ブライアン・シンガー

制作年●2000

上映時間●104分

製作国●アメリカ

日本初公開年月●2000.10.07

最後は年齢不詳な『X-men』。いかにもハリウッド的なSF大作が選ばれて、「え？」と思った方も多だろうが、この映画にはゲイの視点がいろいろ採りこまれている。それもそのはず、ハリウッドでは数少ないカミングアウトしたゲイであるブライアン・シンガーが監督した作品なのだ。

突然変異で超人的なパワーを獲得

した『X-men』。一見、普通の人間と変わらないが、その異様な能力ゆえ人間から疎まれてしまう。そのX-menの一人ウルバリンが、突然、謎の敵に襲われる。そこに彼を助ける男女。彼らはX-menの本拠から送りこまれてきたのだった。

たとえば、ウルバリンが道沿いのバーに入ったとき、中にいる客が一斉にジロツと見る視線——生まれて初めてゲイバーに行った人は、このような視線にギョッとするものだ——のように、さまざまな細部にゲイ的な要素が散りばめられている。それを探しながら見るのも一興だ。

なかでも大切なのは、カミングアウトの問題。X-menは一見普通の人間と変わらない。だから素性を隠して生きていけばX-menだとほれず、迫害も受けない。しかし、自分のアイデンティティを隠して生きようとするとは息苦しい。自分らしく生きるためにはカミングアウトが必要だ。その二つの立場の狭間でX-menは苦悩する。実

はこれは70年代から延々続くゲイのカミングアウトをめぐる主要な争点だった。ゲイも外見からは分からない。ブライアン・シンガーは、その歴史をエンターテイメント化することで、奇想天外なX-menに人間味を持たせ、命を吹き込んだ。ゲイを正面から扱うと、ちょっとしたことですぐクレームがついてしまう状況の中で、表面上ゲイを扱わず、人物造形の骨格としたのである。

『ゴッド&モンスター』でも名演技を披露したイアン・マッケラン、マツチヨなヒュー・ジャックマンなど、男優陣もさることながら、強くてビッチな女優陣もオカマ心をくすぐる。

新入生のための推薦図書

田辺貴久

Takahisa Tanabe

ゲイ・スタディーズ

著●風間孝、河口和也、キース・ヴィンセント

発売●青土社 / 1997

僕たちは自分のことを、ゲイだなんだと言いますが、それは自分の心だけが知っていることで、べつに顔に書いてあるわけじゃありません。普段生活していても他人はおろか、自分自身だって自分がゲイだっということを意識しているわけではありません。つまり、自分でおおっぴらに「僕はゲイだ」と言わない限り、他人にそれを知られるわけでもなければ、虐められるわけでもないですよ。つまり、隠してしまえば万事解決で差別も気にならない！……うーん、ホントにそうなのかな？

実はノンケ諸君が同性愛者の存在に無意識で生活し、ゲイ諸君がそのせいで居心地悪く生活せざるを得ないという抑圧の構造の根っこが、ずば

りここにあるんです。

この、とくになにも言わなければイコール異性愛者として扱われる「異性愛者であたりまえ」な世の中では、ひとたびカムアウトしたり「ゲイ」であると主張すると、あたかも人間ではない別の生物かのように、例えばみんなエイズでセックスしまくりでお肌キレイで芸術感覚優れている、みたいないろいろな性質をイコールで結んで「ゲイ」という生物をうち立てようとしてさめちゃうという、不思議なことがおこります。でも、これはおかしいですよ。だって、俺ら同性愛者はわざわざ「ゲイ」だといわなくても、れっきとしたゲイとしてストレートと同じように生活しているんだもん。だからこのルール、成り立ってないじゃないですか。

本書は「僕たちはストレート同様に生きてるけど実はゲイなんですがねえ？」という戦略で、世にはびこる同性愛差別をめつた切りにしていきます。これがなかなか気持ちがいい！

特に注目すべきは三人の著者も参加する「動くゲイとレスビアンの会」が起し、日本で初めて公にゲイが認められる裁判となった「府中青年の家事件」の裁判の過程。イメージ優先で成り立つちゃった東京都の理論をプチプチと潰していく様かとても爽快でかっこいいですよー！

同性愛・多様なセクシュアリティ

編●人間と性 教育研究所
発売●こどもの未来社／2002

本書では、「同性愛教育」や「多様なセクシュアリティ」を、実際に教育の場で教えるための教育指導案や、実際の取り組みが紹介されています。

「同性愛教育」は、偏見を払って当事者が楽に生活できるようにするためのもの。一方で、下手に同性愛を話題にされたくない当事者がいるのもまた事実という、なかなかデリ



ケートなテーマです。読み進めながら、国語、英語、理科、社会、保健体育など、各教科で工夫を凝らして「セクシュアリティ」というテーマを盛り込む取り組みが実際に行われていることに驚きつつも、本当にこの授業で当事者は楽になれるのかどうかを考えると、本音がのぞきたくありません。しかし、各項目で紹介される「生徒たちの反応」を読んでいると、そんな疑問はいつしか解消してました！例えば中学校の学級活動で、恋愛に関するアンケートを実施しその中で性の多様

性に触れるという授業例では、ゲイの男の子が同級生にラブレターを出したエピソードを扱ってその感想をあつめるのですが、「もしクラスに同性愛の人がいたら、いままでのいろんな出来事にけっこうキズついていたのかなと思います」「これからは『ホモ』ネタをいうやつがいても笑わないで過ごさなと思う」というような感想が挙がっています。もしこのセリフを自分のクラスメートから直に聞いたなら、きつとすぐウレシかっただろうなーと思うと、僕もこんな授業を受けてみたかった！そう本気で思います。

このような授業がどこでも行われれば、それに越したことはないのですが、実際問題それはなかなか難しいのも事実。実際にこういう授業がないのなら本書を読みつつクラスメートの顔を思い浮かべながら、パーチャル授業を体験してみても？ きつと想像の中のリアクションと、実際に授業があったときのリアクションは、そんな

に変わらないんだと思うな！

クワイア・サイエンス

著●サイモン・ルベイ

監修●伏見憲明

訳●玉野真路 岡田太郎

発売●勁草書房／2002

なーんで俺は同性愛者なんだろうなーって、考えたこと、そりゃ一度はあるでしょう？ 「同性愛者の性質と出現率」、原因としてありそうな「ホルモン」「脳」「ストレス」「遺伝子」、



はたして同性愛は「自然に反しているか?」「病気か、それとも健康か?」知りたくないですか?

ここにいまカツコ付きで挙げたもの、これはすべて『クイア・サイエンス』の目次からとったものなんです。そう、この本は、「いったい同性愛とはなんなんだ?」という疑問に正面からタックルを加えた本です。

「いったい同性愛とはなんなんだ?」という疑問は、歴史的にずっと人々の興味を引き、同性愛者自身の切実な問題として、幾度も検討され、答えが用意され、そしてそれがうち砕かれを繰り返して今日まで引き継がれてきました。本書は、社会的・科学的な背景や、当時の同性愛者を取り巻いていた状況を紹介しながら、そんな同性愛者の原因を探る歴史がどのような変遷をたどってきたかを、あまたすことなく書いています。著者のサイモン・ルベイ氏は、同性愛教育研究所の創始者で、同性愛の原因を調査している生物学者です。彼は男性の脳

と女性の脳、ゲイの脳に差異があるという画期的な発見をしました。「原因はホルモンっぽいぞ!」「いや、それもおかしいんじゃないか?」「ストレスが原因だ!」「その調査も疑わしいぞ」「遺伝子に原因発見!」「いや、まだわからないなあ」と、いった感じで、ありとあらゆる原因について、これまで調べられてきた事実があたかも未開拓のジャングルに乗り込んでいく冒険活劇のように映ると同時に、いち同性愛者として読んでみると、まるで自分の脳に、ホルモンに、遺伝子に、調査の手がこそごとく入ってくるようなそんなSF的なエクスタシーも感じます。結局のところ、コレ!と明言できる原因はまだ見つからず、原因を探る長い冒険も、物語半ばです。あなたも、本書を開いて、同性愛の原因を探る「科学の旅」に繰り出してみてはどうでしょう?

同性愛がわかる本

著●伊藤悟

発売●明石書店 / 2000

もしあなたがいま、この『同性愛入門』を誰にも見つからないように買ってきて、誰にも見られないところでドキドキしながら読んでるのであれば、次に『同性愛がわかる本』を読んでみるといいでしょう。自分が同性愛であることに、多かれ少なかれ一度でも悩んだことがあるのなら、この

本ではその時の気持を余すことなく代弁してくれているはず。きつと読みながら何度も「そう! 僕がいたかったことはコレなんだよ!」と膝をたたいてしまおうでしょう。

世の中には、実にさまざまな面において、マジョリテイとなるタイプとマイノリティとなるタイプがあります。同性愛は性の部分でマイノリティと言えます。世の中が、この世の中にある全てのマイノリティを想定して、その立場に立つて成り立つことは不可能でしょう。多数派を想定して物事のしくみができてしまうのは残念ですがしかたがありません。しかしだからマイノリティはマジョリテイに合わせる、生きにくさを忍んで生きなければならぬというわけでもありません。この本では、学校で、社会で、家庭内で、同性愛者がいかに生きづらい状況にあるかを事細かに説明してくれています。その中には、納得できるけれども自分ではそんなに気にならない部分と、納得できてその上でとても我慢



ならない部分がきつとあるはずですよ。その「我慢のならない部分」こそがあなたが生きる上での「こだわり」なのです。「私たちのライフヒストリー」の項で紹介されている3組が、なぜあんなに輝いて見えるのか、それは自分のこだわりを正直になつて、それを頑として貫いたからでしょう。それこそが、自分の一度の人生をよりよいものにし、なにより自分がこの世の中に生きていく意味となるものなのです。この本はそれに気が付くためのヒントになり、そして良き理解者に、時には良き伴奏者にもなってくれることでしょう。自分の人生も、自分の理想の生活環境も、誰も準備してはくれません。おそろおそろでいいから、自分が納得できる生き方の方向に一歩足をふみだしてみようかな、そんな気持ちになれる一冊です。

性」のミステリー

著●伏見憲明

発売●講談社現代新書／1997

私事ですが、私は戸籍上は男性で、性指向も男性、ジェンダーはやや女性的、要するにオネエなゲイです。異性を愛する異性愛が大多数のこの世の中で、自分のこの変わった性指向について、思い悩み、わりと暗い思春期を送りました。自分の性をきちんと見つめようとして、初めて手に取った本が、本書『性』のミステリー』だったので、読んだ私はいったいどう

いう感想をもったのでしょうか？ 答えは「反省」でした。読むまでの自分は、「自分だけが世の中ですつこく変わった人間なんだ」と思っていたのですが、変わるところか、かなり簡単にカテゴライズ出来るタイプの性の持ち主だったんです。ああ、自分が特殊だなんて、おこがましかったです。ごめんなさい。

本書は、9人の登場人物の中から「本物の女」が誰かを、さまざまな視点からの「性」の捉え方を参考に推理していく、ミステリー仕立ての本です。戸籍上の性、遺伝子上の性、社会的な性、見た目の性、性的対象からみる性、性にはさまざまな捉え方

があり、人によってその現れ方はそれぞれであるということを書き知らしめてくれます。まるで作り話のようですが、事実は小説よりも奇なり。具体的な事例や調査をもとに、性に対する認識を鮮やかに完膚無きまでに崩してくれるのです。その一方で、それではなんでそんなにバラエティに

富んだ性の現場で、相も変わらず異性愛が主役として堂々と手を振っているのか、男と女の性の二元性がはびこっているのかという疑問に立ち戻り、現実の性の問題を改めて教えてくれます。あなたは9人の中に本当の女の人をさがしだせるのでしょうか？ いや、そもそも自分の性が「コレだ」と、きっぱりいい当てることのできるでしょうか？ さあ、心の準備ができれば、性のミステリーツアーのはじまりはじまり。

ボクの彼はどこにいる？

著●石川大我

発売●講談社／2002

主人公は小学校の時には委員会が一緒だった一年先輩に初恋をし、中学校では好きなアイドルに胸をときめかせ、高校では恋愛話で盛りあがりながら自分について悩み考え葛藤し、そ





うして成長していった青年である。これだけみると、どこにでもいそうなごく平凡な主人公ですよね。こんな平凡な主人公は、平凡な学校生活を送って、平凡な社会人になって、平凡に生きていくに決まってるんです。

しかし、この物語の主人公・石川大我さんの人生は決して平凡にはいきませんでした。なぜなら彼は「ゲイ」だったから。初恋の相手が男の子で、好きなアイドルがジャニーズで、気になるクラスメイトが男子だったという、ただそれだけのことが、彼をずっと悩

ませ続けることになったのです。

本書はそんなゲイの青年・石川大我さんが、だれにも言えずに悩み、苦しみ、そして諦めながらすごしてきた青春時代に、彼が「ホントにいいかったこと」を書きつづつたものです。ノンケの友達に話を合わせて女好きな自分を演じたこと、修学旅行では寝言で好きな男の子の名前を言わな

いかびくびくしたこと、大我さんは明るく書いているんですがどれもチクチク胸を刺すような、自分にも覚えのあるエピソードばかりです。

仮に、大我さんが好きになった相手を全部女の子に交換してみると、たちまち彼はどこにでもいるようなごくフツの男の子になりかわるのです。ごくフツの男の子なのに、ただ好きな相手が男っていうだけで、一体どうしてごくフツの青春時代を過ごせず、悩まなくちゃいけないんでしょうかね？ そのことが本当に不思議でなりません。大我さんは今、ゲイが自分らしく生きられるような世の中

になるように、さまざまな活動をしていきます。第一の「ボクの彼氏はどこにいる？」が出てこないような世の中にしていくなことが、僕たちがこれからしていくべき事なんだと思います。

プ ライベ ート ・ ゲイ ・ ライフ

著●伏見憲明

発売●学陽書房／1991、学陽文庫／

1998

これを読まずして二丁目に足を踏み入れるべからず。そう言っても憚られないくらい、いまの日本のゲイシーンに多大な影響を与えた、ゲームーブメントのまさに金字塔というべき作品です。1991年、本書の「ヨードン！」の号令で、暗黒だったゲイシーンに光がさし、90年代の空前のゲイブームを呼び起こし、そして今の世のような、ちょっとしたハードルを越えればハッピーが広がっている、そんな

世界が作られていったのです。

本書は、ゲイに関するFAQ、著者のライフヒストリー、恋人とのゲイライフのエッセイ、性にまつわる問題へのコラム、性の多様性の理論（ゲーム）、そしてパートナーとの対談と、もろだくさんの内容がポップでヒップにぎゅぎゅつと詰め込まれています。本書が最初に出版された1991年といえば、「ボクはゲイだ！」と公言するなんてことは、著者自身が後に語るように「決死の覚悟」が必要などんでもない行為でした。にもかかわ



らず著者は本書でおそろおそろ世間に
に独白をするわけではなく、あろうこ
とかノンケ中心の社会に、ハッピーな
ゲイライフ像や、性の多様性の論理
たたきつけ、性戦の「挑戦状」を
たたきつけてしまっているのです！
この勝負がどういう顛末を経たのか
は、後のゲイムーブメントの爆発を見
れば一目瞭然ですね。

今、21世紀を過ごす僕らは、ふた
たび本書から「挑戦状」をたたきつ
けられます。いいようのない抑圧のな
かで、それでも「自分はまちがってな
い！」と確信し、自分の信条に筋を
通して生きてきた著者の生き様に、
僕たちはしつかり向き合えるだけの
ゲイライフを過ごしているのではし
ょうか？ 僕たちの暮らす21世紀は性の
多様性が認められた、ゲイにとつても
ぬるい時代となりました。その、開墾
された地平にたつて、僕らがどれだけ
ゲイとして、筋を通して生きていくの
か。本書はそれを見つめ続けているの
です。

ゲイという「経験」

著●伏見憲明

発売●ポット出版／2002

伏見憲明氏の「経験」は「ゲイ・シー
ン」が辿ってきた「経験」と換言でき
ると思います。伏見氏の繰り出す一文
字一文字が、ゲイのフィールドを日本
中に広げていきました。本書は、ゲ
イ雑誌「バディ」に連載された「伏見
ゲイ新聞」をはじめ、さまざまな媒体
に広がった著者の言葉を結集し、オマ
ケに『キャンビイ感覚』とデビュー作
『プライベート・ゲイ・ライフ』を加
えた、まさに伏見憲明大辞典！ ゲ
イなら必読。読まなきゃソンな一冊よ。
その中でもキラリと光るのは、本
書で初めてひとつにまとめられた、「ゲ
イの考古学」の章。なんで同性愛つて
ものがあるのか？という疑問と同じく
らい不思議なのは、なんでゲイの歴
史つてのがはじまったんだろ？つて
ことじゃないですか？ 今でこそネッ

トに繋がれば無限にゲイと繋がれるし、
本屋に行けばゲイ雑誌を立ち読みで
きる世の中なのだから、他のゲイと
繋がる事なんて楽チンだけど、そうい
うものがまったくない時代、ゲイつて
ことを隠して生きていたら、奇跡で
も起こらない限りは、ほかのゲイと知
り合う機会というものはないわけじや
ないですか。そう考えると、この物語
は「奇跡」のストーリーなのかもしれ
ない。

いかにそんな「奇跡」が起こり、集
結していったか、それはもちろんヘー
ジをめぐるお楽しみ。しかし読んでみ
ると、ううむ、たかが性欲、されど
性欲。抑圧や、否定的な言説の下で、
それでもあつげられんとゲイライフを
営んできた超人達のエピソードは、い
かに人間の性欲とそこから生まれるエ
ネルギが、強力でクリエイティブな
ものかを知るに余りあるものです。こ
れを人間の業と言わずしてなんとい
うのか。

僕らはそんな、人間の業が呼び起

こした奇跡の上に、いまの楽しいゲイ
ライフを送っているわけです。今日の
平和が、戦争によるたくさんの犠牲
の上に築かれたように、今日のハッテ
ンも、たくさんの人の努力と欲望の上
にたつているんですよ！ 本書のエピ
ソードの裏にかくされた、ゲイと繋が
りたくても繋がることのできなかつた
たくさんのゲイ先輩を思いながら二
丁目の空を見上げると、ちよつとクサ
イけど、ふつとふるさとにいるような
懐かしさと、だれかに見守られている
あつたかさを感じちゃったりして。



もっと深く同性愛を 「体験」するための読書

伏見憲明

Noriaki Fushimi

ゲイ&レスビアン・ ライフ

九〇年代以前にも、同性愛者によって書かれた書籍はわずかながらに存在した。直接、同性愛を主題にしたものでないしろ、美輪明宏（発刊当時は丸山明宏）の自叙伝『紫の履歴書』（初版1971、水書房1992）は芸能人の赤裸々な告白の書としてベストセラーになったし、おすぎとピーコの出版した本の数々も、自らのセクシュアリティをあからさまに謳っていた。あるいは、先駆的というにはあまりに政治的に異端であった東郷健（『雑民の論理』エポナ出版、1979や、『欲情のキスをどこにするのか』三書房1981。ともに『常識を越えて』ポット出版、2002に収録）による単行本も、何冊かは発表されていた。しかしそれらは、同性愛者一般の状況を反映したものというよりは、超個人的な彼ら個人の生き方や考え方を著したものであったと言えるかもしれない。

当事者によって同性愛者一般の問題を捉えようとした単行本としては、一九八五年に上梓されたプロジェクトG編『オトコノコのためのボーイフレンド』（少年社、1985）が嚆矢とされる。七〇年代のゲイリブに開いた活動家や、後に動くゲイとレスビアンの会で活動するメンバーなどによって編集されたこの本は、一般書籍としての広がりは見せなかったものの、九〇年代のゲイライフの予言書とも言えるポップな内容であった。

そして九〇年代になると、カミングアウトを主題にした一群のノンフィクション作品が現われることとなる。拙著『プライベート・ゲイ・ライフ』（学陽書房、1991）を露払いに、掛札悠子『レスビアン』である、ということ（河出書房新社、1992）、動くゲイとレスビアンの会編『ゲイ・リポート』（飛鳥新社、1992）、伊藤悟『男ふたり暮らし』（太郎次郎社、1993）、西野浩司『新宿二丁目と君に逢ったら』（宝島社、1993）、出

雲まるる『まな板の上の恋』（宝島社、1993）、笹野みちる『Coming Out』（幻冬舎、1995）、大塚隆史『二丁目からウロコ』（翔泳社、1995）、石川大我『ボクの彼はどこにいる？』（講談社、2002）——等々が続々と刊行された。これらの本に共通する主張は、自分のセクシユアリティを偽って異性愛のライフコースに甘んじるよりも、ゲイ、レズビアンとして正直に堂々と生きていこう！ というものだった。それまで、秘めたる性的嗜好でしかなかった同性愛に、ゲイライフ、レズビアンライフというライフスタイルのオプションが示されたのだ。

また、時とともにカミングアウトするスタンズにも広がりが見られる。HIVポジティブの大石敏寛『セカンド・カミングアウト』（朝日出版、1995）、高校教師の池田久美子『先生のレズビアン宣言』（かもがわ出版、1999）、セックススワーカーのハスラー・アキラ『売男日記』（イツシプレ

ス、2000）、HIVでドラッグクイーンの高谷川博史『熊夫人の告白』（ポット出版、2005）、大阪府議の尾辻かな子『カミングアウト』（講談社、2005）などが刊行。また、同性愛以外のマイナーなセクシユアリティ／ジェンダーを扱った書籍が次々に出版され、さまざまな性的少数者が社会に姿を現わしていくこととなった。

そして、このように現実の当事者が顔が見える形で主張を始めると、公の報道機関での露骨な差別や、第三者による同性愛に関する無責任な発言はだんだん少なくなっていく。一昔前までは、セクシユアリティ／ジェンダーの研究者でさえ、同性愛についてはこういったことが公然と語られていたのだ。

「種は、繁殖のためには異質なものとの交配（ヘテロセクシユアル）によるほかないという逆説を、人類におしつけた。だから同性どうし（ホモセクシユアル）のカップルを、法律は決して夫婦と認めないし、因循な法同様、私

じしんも、ホモセクシユアルは多様で自然な愛のかたちの一つにすぎないという、ものわかりのよさそうな意見に与しない」（下野千鶴子『女という快楽』1986）

「すべての男は女嫌いだけれども、それが肉体化されるまでに顕在化してきてる人をホモと呼ぶんです。男と寝たいことに気づいていない男と、男と寝たい自分に気づいてない鈍感な男と違って、鈍感な男をノーマルと呼んでるだけです」（小倉千加子『男流文学論』1992）

「種は、繁殖のためには異質なものとの交配（ヘテロセクシユアル）によるほかないという逆説を、人類におしつけた。だから同性どうし（ホモセクシユアル）のカップルを、法律は決して夫婦と認めないし、因循な法同様、私

しつたかぶりの偏見が、当事者不在の状況の元で横行し、同性愛者ははつきり言って「言われっぱなし」だった。無知による蔑み、文学的な妄想、男性嫌悪によるルサンチマン——同性愛は何とでも語っていいような対象だったのだ。

そうした言説状況の中で世に出ていった先のカミングアウト本は、それ自身がからだを張ったカミングアウトだったとも言える。現在の同性愛者

を取り巻く状況からは、それらの言葉はいささか力みが過ぎていのように感じられるかもしれないが、そうした迫力があつたからこそ、時代の空気を一変させることに成功したのである。

新しい世代のレズビアン&ゲイにもぜひとも、これを機会に、かつてカミングアウトが時代のテーマだった頃の当事者の言葉に触れて欲しい。あるいは、リアルタイムでは、ホモフォビアやら無関心で、そうしたメッセージに背を向けていた人々たちも、改めてそれを受け止めて欲しい。貴方が一人ではないことを伝えようとした人たちがいたことを、ぜひとも知ってほしいから。

セクシユアル・マイノリティ

九一年、『プライベート・ゲイ・ライフ』（学陽書房）を発表した私のもとには読者からたくさんの手紙が寄せられた。そうした反響の中には、レズビアンや、トランスジェンダーの人たちのものも少なからず含まれていた。

さらにゲイライターとして活動していく中で、実際に私の周りにゲイ以外の性的少数者の人たちが現われるようになっていった。それまで自分のセクシユアリティの問題に精一杯だった私も、「同性愛」という言葉に反応して集まってきた、より周縁の「性」を生きる人々に関心を持たざるを得なくなり、『クイア・パラダイス』（翔泳社、1996。2003ちくま文庫化予定）という対談集を企画した。トランスセクシユアル、トランスジェンダー、インターセックスなどのことをより深く知れたかった。

その後、そこに登場してくれたトランスセクシユアルの虎井まさ衛も、自著『女から男になったワタシ』（書房社、1996）で自らの半生を語り、またインターセックスとして自らの居場所を求めた橋本秀雄も、『インターセクシユアルの叫び』（かみがわ出版、1997）で性別二元制のありようを世に問うた。そうしたマイノリティの動きによって、性的少数者という枠の中で

同性愛者は相対化され、「性」の多様性はより明確なものとしてイメージされるようになったと振り返る。とくに、埼玉医大で実施された「性転換手術」のインパクトは、男女の境界が連続的だという認識を静かに広めていったと思う。

当初私は、「変態」として同性愛同様、社会から排除されてきたトランスジェンダーなどに対して、同志的な感覚を持つて接していた。が、多くの出会いとコミュニケーションを通じ、共有する問題以上に、それぞれに異なる背景と、存在論理があることを痛感するに至った。それは否定的に言っているのではなく、よく理解できるようになったということだ。

違いを知ることもお互いが付き合っていく上で大切なことだろう。ろくに相手を知らないくせに、すぐに「被差別者どうし共闘すべき」とか「弱者である彼らを助けましょう」といったスタンスに立てる人の方を、私は逆に信じられない。今の私は、性的少

数者どうしの関係は、必要ときに助け合えばいいが、そうでなければあえていっしょに行動する必要はない、と考えている。

また、自身の仕事の功罪に関わるのかもしれないが、「クイア」「セク

シユアル・マイノリティ」という括弧を打ち出したことで、同性愛者としての性的少数者がいっしょに行動することが「正しく」、例えば、レスビアン&ゲイだけでパレードをするのは他の性的少数者を「排除している」と



言うような傾向がネットワークの中で出てきたことも問題だった。あるいは、常に少数者は正しくて、多数者は間違っているといったスタンスで批判するような議論にも疑問を感じた。

それぞれの主体を立てる自由を認めないような「セクシュアル・マイノリティ」という共同性の問題、少数派の立場にのみ正統性の根拠を置くような批判の仕方に対しては、伏見憲明編『クイア・ジャパン』4友達「伏見憲明・野口勝三ほか『オカマ』は差別か」(ポット出版、2002)で反論を展開しているの、参照してほしい(「ゲイ」「レズビアン」という共同性が問題とされるのならば、「セクシュアル・マイノリティ」という共同性だって、同じロジックで立てられなくなってしまう)。

ともあれ、相手の現実を知らないでは何かで組むことも、批判することもできないわけだから、私たちは自分たちにとっての他者を理解する努

力も必要だろう。もちろん、すべてを共感したり受け入れることもないのだが。

トランスジェンダーに関しては、当事者の立場からのものでは宮崎留美子『私はトランスジェンダー』(ねおらいふ、2000)がわかりやすい解説書となっている。自分を弱者の位置に置くばかりでなく、自身が矛盾した結婚生活を送っていることなどを誠実に内省している著者に、私は人間としての奥行きを感じた。客観的なルポルタージュとしては、松尾寿子『トランスジェンダリズム』(世織書房、1997)が深い洞察を記している、推薦できる。

同性愛の歴史

共同体の鏝(かすがい)となるのが「歴史」というものならば、コミュニティというフィクションをより豊かなテーマパークとするために、過去の事実を「歴史」として再構成してみるのも意味のあることかもしれない。「歴史」



はアトラクションだ。

私は『ゲイという「経験」』(ポット出版、2002)の「ゲイの考古学」という章で、男性同性愛者の前近代から戦後までの「歴史」を、「欲望の自己実現」という視点から素描する

試みをしている。ミシェル・フーコーの『性の歴史』(新潮社、1986)以後の、同性愛者という主体は近代に構築された云々——の方程式に単純に乗っかるのではなく、もう少し当事者の欲望に添った形で同性愛の時間

『ゲイたち』(中央公論社、1998)などを読むと、アメリカと日本では同性愛に対する社会の基盤となるものが相当に異なることが理解できる。それは単純にどちらが同性愛に寛容かというような話ではなく、その抑圧の構造が宗教的な「原理」を背景にしているのか、「世間」というような相

関関係、雰囲気によっているか、という違いだ。そして、後者の方が柔構造であるという点で、私たちジャパニーズ・レズビアン&ゲイは今、かなり「面白い」状況の中に置かれている、と言える。そうした問題については、『クイア・ジャパン2000』変態するサラリーマン(勁草書房、2000)のインタビューで、宮台真司が論及している。欧米中心主義の視点から日本を遅れていると一方的に裁断するのではなく(日本という状況と格闘していない日本人にこそ、よく見られる主張なのだが、表層的には捉えづららしい差別の内実を冷静に分析することで、日本のゲイ&レズビアン・ムーブメント

の方向性が見えつきりと見えてくるだろう。そのためにもそれぞれの「歴史」を深く検討してみる必要があると痛感する。

クイア・カルチャー

クイア・カルチャーのもつとも豊穣な実というのは、やはり性愛にまつわる部分であろう。その自由さ、多様さ、積極さ、ユニークさは特筆に値する。ハッテン場などの発明は、私たちクイア(変態)が多数派に誇れるものだと思っ

ていい。その象徴である「パティ」(テラ出版)、『ジーマン』(ジブプロジェクト)といったゲイマガジンに見られる、セックスへの飽くなき探求の姿勢には、「好色」などという狭い見方を覆すような、肉体的性化とパートナーシップの可能性を垣間見ることが出来る。

そうしたセックス・カルチャーの一つの結晶として田亀源五郎のコミック『銀の華』(上・中・下、ジブプロジェクト、

2002完結)が挙げられるかもしれない。田亀の作品は、卓越した技術と表現力でエロマンガをエロティック・アートへと昇華させている。また、編者としても『日本のゲイ・エロティッ

ク・アート』(ポット出版)を出版している。

最近ではレズビアンの中からも、『カーミラ』(ポット出版、2001)という女性どうしのエロティシズムに焦



点を当てた雑誌も出版された。これは中盤からはコミニティ雑誌としての機能も果たした。単なるボルノグラフィなど馬鹿にせずに、ぜひとも一般の人にもこれらクイア・カルチャーの官能性に触れてもらいたい。

また、そうした性愛文化から一般社会への輸出品であった、拙著『快樂の技術』（斎藤綾子伏見憲明、河出文庫、1997）、『マイクラブ研究会編『H大作戦！』（徳間文庫、2001）などでも、クイア・セックスのテイストと創造性が十分に堪能できるはずだ。

そしてセックスを別にすると、過去同性愛を表した作品は、三島由紀夫の『仮面の告白』『禁色』（新潮文庫）のように、己の内に生じた不可解な欲望との葛藤を表したものが多かった。そのマイナー性こそが文学的な意味に結び付けられたのだ。しかし、九〇年以降は、西野浩司の『新宿二丁目君に逢ったら』（宝島社、1993）など、ゲイライフ、レズビアンライフを肯定的にサポートするようなフイ

クシオンも現われるようになった。それらは従来の文学的感性を嗜好する人たちには関心ないものかもしれないが、当事者にとっては、まさにそのメッセージが重要であった。

また、最近では、カミングアウトの困難さにフォーカスするのではなく、ゲイとして生きることを当たり前の前提にして、そうした人生を以後どのように生きるのか、といったテーマを追求する方向性も出てきた。橋口亮輔監督の映画『ハツシュ！』とそのノヴェライゼーションである『ハツシュ！』（アーティストハウス、2002）などは、二十一世紀のゲイライフの問題として浮上してくるだろう。同性愛者の自己承認と、その生き甲斐といった主題をいち早く打ち出している。

伏見憲明編『クイア・ジャパンVols 夢見る老後！』（勤草書房、2001）も、同様のテーマに「老後」という切り口で迫っている。「ゲイコミニティ」というフイクシオンを立てることによつ

て、ゲイライフに「生」の意味を供給し、より充実した人生を切り開いていこうと展望するものだ。

そういう意味では、クイア・カルチャーの現在の中心課題というのは、同性愛者などマイノリティの「解放」でも、「同性愛者」という主体や共同性の懐疑でもなく、そうした「縁」によつてもたらされるライフスタイルをいかに充実させていくのか、という問題系に移行しつつある。

もちろん、そうした「縁」を利用しないという同性愛者がいてもいいが、せっかく同性愛の欲望を内に持つ人間として、それを通じて誰かと関わる機会を多く得てきたのだ。その経験は、人生の資源として有効利用することが可能だろう。また、そのためにこそ、カルチャーは創造されるべきなのである。

レズビアン&ゲイ・スタディーズ

十数年前、『プライベート・ゲイ・

ライフ』（学陽文庫）『ゲイという「経緯」収録、2002）を執筆している頃の私には、「ゲイ」「ホモ」「同性愛者」といったカテゴリーは、自分を抑圧し差別するような被差別記号でしかありえなかった。というか、まだ余裕がなくて、そうしたネガティブな側面にしか意識が向いてなかった。それに、八〇年代には思想オンチでポストモダンの論調にはとんと関心のなかった私も、気分としてはポスト構造主義的なるものに影響を受けていたのだろう。なんとなく、「同一性」とか「同性」といったものに対する否定的な感情は共有していた。だから私はその処女作に、これはゲイ解放宣言の書であるとともに、「しかしいずれば『ゲイ』というカテゴリーが解体されるのが『正しいこと』だ」というふうな旨を、はつきりと記していた。そういう意味では、すでに、九〇年代半ばに欧米から輸入されることとなったクイア・セオリーともロジックを共有していたのだろう。

そうした感受性は、同時期に発表されたレズビアン・スタディーズの嘴矢、掛札悠子『「レズビアン」である、ということ』(河出書房新社、1992)にも見出される。そこでもすでにレズビアンという主体の構築性と、それへの懐疑が問題意識として打ち出されていた。

日本における同性愛差別の政治構造を明らかにしようとした最初の仕事としては、平野広朗の『アンチ・ヘテロセクシズム』(ハンドラ、1994)が挙げられるが、それに続くゲイ・スタディーズとして上梓されたまさに『ゲイ・スタディーズ』(青土社、1997)は、日本のゲイ「解放運動」を担ってきた動くゲイとレズビアンの会の、キース・ヴィンセント、風間孝、河口和也によって著された。けれども、

この本の理路も、政治的な主体としては「同性愛者」を立てて戦略的にそれを使っていかなざるをえないとするが、「同性愛者」という主体自体は政治的な意匠として以外には重視されない。

これらはどれも、差別と抑圧の根源は「同性愛者」のカテゴリ化とその制度化により生じたものあり、そうした土俵自体を解体しないでは差別と抑圧は解消されない、とするロジックを内に持っている。それは、現在ジェンダー・スタディーズを席捲している社会構築主義、クイア・セオリーとも同様のものである(この手の議論の入門書としてはアエラムック『ジェンダーがわかる』(朝日新聞社、2002)がわかりやすい)。つまり、日本のレズビアン&ゲイ・スタディーズは、最初

から、単純な本質主義からは始まっていなかったのだ。しかしその理路においては、ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』(青土社、1999)のクイア・セオリーと言われるものほどの徹底さはなかった。つまり、政治的な意味としてはともかく、理論としては中途半端なものだったと言えるかもしれない。

そのようにゲイ・スタディーズの議論の流れを喝破したのは、伏見憲明編『クイア・ジャパン』(3)魅惑のブス(勁草書房、2000)に「クイア理論とポスト構造主義」という論文を発表した野口勝三である。そして野口は返す刀で、実はそういうクイア・セオリー自体も、本質主義の罠に陥っていると、批判する。土俵を解体することが正しい、とするのは、ひとつ

の形而上学(真理)であり、クイア・セオリーの理路は、人々の実存の中から生じたものではなく、思弁的な理念にすぎないというのが、彼の議論である。

ポスト構造主義の思想それ自体を批判の射程に入れた野口勝三の理論は、近刊『正義』(ポット出版、2003)でも展開される。今後、ジェンダー/セクシュアリティの領域で、そうした新しい思潮が台風の目となることは間違いない。

海外のゲイ・クイア・スタディーズに関しては、川口和也『クイア・スタディーズ』(岩波書店、2003)でその流れが概観できる。同性婚については赤杉康伸・土屋ゆき・筒井真樹子『同性パートナー』(社会批評社)に詳しい。

